

東條先生の「全国方言辞典」によせて

藤原興一

東條操先生は、その忍耐づよい御苦心の經營によつて、こゝに、「全国方言辞典」を完成された。これが、長い間の御念願であつたことを伺い知る一人として、私も、感慨にたえないものがある。先生のお年と御風貌との推移につれて、この辞典へのお志は、ますます毅然としたものになつていつたように思う。学問一路のお心もちがひしひしと感ぜられた。内助者大岩正伸氏は、このころにしっかりとつながつていかれたに相違ない。氏は先生と共に強靱である。お二人のむすびつきが、方言辞典の出現に、どんなに幸したことがか。

「全国方言辞典」をとりあげると、先生の苦勞のお道行きが、そゞろしのばれる。何か悲痛なものが手に重く感ぜられる。しみりと、やがてたのしく、読み入らせら

れる辞典である。

「全国方言辞典」は、手きわよく整頓され、上手に要約された座右宝典である。

巻頭に、「日本方言区画図」がかゝげられている。これは、巻末の「方言概説」一篇と対応する。「日本方言区画図」は先生の、国語方言区画についての口熟した結論と言えよう。平凡なようであつて、けつして平凡でないものがある。東北方言の内を分けることや、南島方言または琉球語の内わけ処理、あるいは東西方言対立の色わけ処理など、正に要領を得て居られる。先生は、柳田国男先生とともに、わが国方言研究の歴史をそのまゝあゆんでこられた。国語方言の研究と、方言の実相とは、先生の手の

中にはいつている。じつは御自身、踏査をなさる方ではない。先生には先生の御使命があつた。お歩きにはならないで、国語方言の全国状態を按ずること、じつに、掌を指すようなものがある。地方を見通しておつしやることは、ほとんどすべてが、肝心なところなのがないと申してよいのであろう。そのような全国観察が、簡約されて「方言概説」の敘述となり、凝つて「日本方言区画図」となつてゐる。

「方言概説」と「日本方言区画図」とは、先生の、国語方言を把持される、把持のしかたを示すものである。国語の方言状態はどう見られるか。それを先生はねりにねられて、このようにまとめられた。「方言概説」までに、この種の多くの前身の御執筆がある。これは、そうした洗練コースのりっぱな結晶である。地方を歩くわれわれは、先生の地方洞察におどろくばかりである。このごろ、「増補改訂日本文学大辞典」の「別巻」を見ると、「国語学新講」の項(九六頁)に、この書の「価値」が説かれて、中に、

新研究に対する鋭敏な感覚

との表現がある。東條先生についての「鋭敏な感覚」云々は、共感を禁じ得ない。先生には、お年にかゝらぬみすゞしい感性があり、『方言感覚』は鋭敏である。先生のシリエロンは、多くのエドモンを産むであろう。このように考えられる先生の方言認識、国語方言の把握のしかたが、「方言概説」というまとめになっている。そして、「全国方言辞典」一巻の整頓力と整頓方策とは、こゝから出ていと解される。

「全国方言辞典」は、国語辞書中の一特殊辞書である。俚言辞典と言ってもよいものである。この俚言は、どのようにしてこられたかにまとめられたであろうか。その手順はともかく、理念としては、先生に、「これが、国語の統一的方言状態を語彙の世界として眺めた時の、その語彙の世界の、要領のよいとりあげかたになるように。」ということがあったにちがいない。つまりこの俚言編修は、国語方言状態の、語彙観からする、それこそ要約上手のとりあげかたと言える。人々が今、本書をひもとく時は、ねらったことがなく、おこなわれる土地の示しかたに不備のあるのを見いだすであ

らう。できれば、それらものせられてゐるのがよい。が、ことには限度がある。一定の制約のもと編修では、目標を限定するほかはない。その時、先生としては、ある水準での、要を得た語彙整頓をこゝろみよりほかはなかつただろう。こうして、莫大な数のカードが、漸次陶汰されることになった。本書の俚言編修は、その帰結である。こゝに先生は、文章を用いないで、この単語排列の組織を用いて、国語現在の方言的世界を、要領よく語って居られるのである。本書を、読む辞書とも言うならば、それは、このような実質の『国語説明』をも読みとるべきである。

読めばどのような「利用価値」をとら得ようか。どのように読もうとも、いろいろの効果をうけとりうることは、すでに諸家が指摘していらつしやる。こゝでは、過日の国語学会で柳田先生のお述べになった一句をかゝれば、

国語史研究の志の発表

とのことであつた。本辞書の体裁にととの

えられた『国語方言のすがた』が、さまざまの意味で、国語史研究に役だつことは明白であろう。語彙の世界にはあるが、こゝに、国語の史的推移が投影されている。事実と法則とは、本書の中にうすくまつてゐる。本書は、国語史の研究に、基礎的に貢献する。しかし、これが限られた編修であつてみれば、いすれ不如意はまぬかれなであろう。そこで、柳田先生のおこぼれをかりれば、これは、「第二期第三期の方言辞典」に発展していかなくてはならない。とすれば、「志の発表」とは、たのしい将来をよぶにたる、弾力のある表現とされるのではないか。今は本書がその「志の発表」であることに、かくべつ大きい意味があると思う。

柳田先生と東條先生とは、おあゆみになる道すじが一つではなく、一方は民俗学であり、一方は言語学である。しかし、今、こうして「全国方言辞典」の名のもとに俚言辞典が出てみると、これは柳田先生のおしごとと深く関連している。先生は、こゝに、「方言辞典」の名のもとに言語学の民俗学的方法とも言つてよいかと思うものを、実

踐されたとも解しうる。

方言研究のなやみ多いこの道において、「全国方言辞典」という一大礎石を得たことは、何としてもわれ／＼後進の無上のよろこびである。と同時に、これをさらに発展せしめて、大きな形と内容とに充実せしめることは、今後のわれ／＼の共同の責務であると痛感される。確乎とした日本語方言辞典の誕生を望んでやまない。

本格的な方言辞典のためには、ただけのことが考えられようか。第一に、一定の企画による直接調査が望ましい。それは、臨地調査ばかりによるわけにもいかないだろう。適宜の通信調査がまじえられてよい。とすれば、文献調査もまた利用して、先生のお考のように、もう一度通信調査にかけて補正する。

集成としては、一定基準にかゝわるかぎり、全俚言をつくすつもりが欲しい。多量を求めつくし、かつ、そのおの／＼の分布をえんとす。いちおう語彙の辞典としてと、実詞以外の諸方面を十分

に集成する。そのてにをはなどの場合をばじめとして、副詞の場合も名詞の場合もすべて、用法を概説し、典型的な用例を加える。語史も説明されるとよい。適当な場所に、音標文字の註記も加えられたのがよい。

音訛をはじめとして音声上のことを説いた一篇、方言文法を概説した一篇が、国語全体の見地で、別にとゝのえられるべきである。

以上のようなことは、まったく、先生の「全国方言辞典」に促されて言いうることである。なお思うのに、いわゆる方言辞書が、国語教育者の、その土地々々の方言指導の毎日に、すぐに実際に役だつように工夫されないものであろうか。研究一般の

ために学徒が利用する辞書であるとともに、教育の実際家が常時利用して有効というようなものになし得ないものであるか。索引の諸方法なども、こゝに考えられると思う。

「書評」というようなことは、とてもできない。また、内容を一つ一つかみしめることにつとめているところである。学恩を忝うしている弟子として、ただ／＼感想を申し述べたまでである。

披見せられるかた／＼が、直接に、本書に『国語の事実』を見取られることを念願する。

(二七・六・二一)